

小学校保健科の教科書における一考察 —一体に関する学習を通して—

吉村 亜沙子

A study on Textbooks of Health Education in Elementary School —Focusing on Learning Physical Aspects—

Asako YOSHIMURA

1. 問題の所在・目的

小学校保健科の教科書が導入されて20年が経過した。この間、小学校学習指導要領の改訂は3回、教科書の改訂は6回、行われてきた。また、小学校保健科における研究は、発達段階に合わせた学習内容の検討、授業プランの提案や考察などは行われてきた¹⁾。しかしながら、小学校保健科の教科書における内容構成についての検討は見当たらない。

これは、学習指導要領の総則において、「学校における体育・健康に関する指導は、児童の発達段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。」と示されてきた経緯のためである（傍点筆者）²⁾。これにより、他教科とともに学ぶ教科として、長く位置付けられてきた。その意味で、保健科独自の学習内容は何か、また、その内容をどのように構成し教えるべきなのか、について明らかにすることが求められてきた。

保健科の学習内容は、ほとんどが体にかかわる内容で構成されている。これは、小倉が初めて保健科の学習内容について構造化を試み、体の構造を基礎として捉え、様々なことを保健として捉えようとした5領域試案の影響を色濃く残している^{3) 4)}。この5領域試案は、保健科の内容を構造的にとらえるという点においては、画期的なことであったが、その内容は、生理学的、解剖学的な内容が多く、高度であった。そのため、教科書の内容構成にも影響を与えた。とりわけ、人の体を扱う単元においては、その影響が顕著に表れ、保

健というよりは、理科的であるとの批判が以前からみられる。

そこで本研究では、次の2点を目的とした。

- ① 小学校の保健の教科書における“体の発育・発達に関する単元”の内容構成について、その変遷と特徴を整理し、問題点を明らかにする。
- ② ①を踏まえ、“体の発育・発達に関する単元”の内容構成について仮説を提案し、この単元の具体的な教科書プランを提示する。

2. 方法

小学校保健科の教科書導入から、これまでに発行されている体の発育・発達に関する学習を取扱う教科書29部および、新学習指導要領(平成22年)に準拠して発行される検定済みの教科書5部、計34部を検討の対象とする。検討の単元は、小学校学習指導要領における体の発育・発達に関する単元である。そして、教科書の内容構成の分析にあつては、学習指導要領解説を参考に検討項目を抽出し、抽出した項目に関する内容解釈の視点や内容を伝えるための手法等も分析の対象とした。

3. 学習指導要領別の教科書に見られる特徴

導入当初からこれまでの教科書の内容を検討した結果、内容構成は、徐々にではあるが変化していることが明らかになった。以下では、変化の代表的なものを指導要領の改訂別にみていく。

- (1) 平成元年の指導要領に準拠した教科書にみられる特徴

この時期の教科書は、初めて教科書が登場し

たこともあり、学習指導要領に示されている内容を具体化しただけの傾向がみられた。また、大部分の教科書で、年齢に伴う体の変化に関する学習において、身長や体重の平均値の変化のみを取り上げていた。

- (2) 平成10年の指導要領に準拠した教科書にみられる特徴

この時期の教科書から、内容構成における大きな変更がみられる。それは、体の発育・発達に関する単元を取扱う学年が、第5学年から第4学年になったことである。そのため、単元名についても「体の発育と心の発達」から「育ちゆく体とわたし」となり、単元名の中に「わたし」が追加され、自分を主体として捉える視点が加えられた。さらに、発育の男女差に関する説明が示されなくなった。これらの変更により、教科書の内容は、これまでの身長や体重について、全国の平均値と比較することを前提として扱われるようになっていたものが徐々に少なくなり、“平均身長の変化”から個々の身長の“伸び”に注目し、記述されるようになってきている。

- (3) 平成20年の指導要領に準拠した教科書にみられる特徴

学習指導要領に示される内容について、大きな変化はみられなかった。しかしながら、教科書の内容構成についてはいくつかの特徴がみられた。顕著な特徴としては、全ての教科書が身長の“伸び”について注目するようになっていたことである。また、多くの教科書が“思春期の体の変化”のアドバイスとして“大人の体験談”を取り入れるようになってきている。

4. 教科書プランの提案と特徴

本提案では、これまでの変遷から見られる問題点を吟味し、次の2点について特に配慮し、内容を構成している。なお、内容構成の章立ては図1の通りである。

- 1 大きく育ってきたわたし
- 2 もっと大きくなってゆくわたし
- 3 大人の体に近づいてゆくわたし

図1 育ちゆく体とわたし

- (1) 子どもたちが学習内容を自分のこととして捉えられるようにする

小単元で学んだ内容の中で、特にしっかりと捉えてほしいことをかみ砕いて、自分のこととして整理しやすい言葉にし、学校医さんからの一言としている。例えば、図2は、「1. 大きく育ってきたわたし」の小単元の終わりに入れている。ここでは、単元の中で学んだ個人差や自分らしく変わっていくということに触れ、自分が自分らしく変化していけばいいということを再確認できるように工夫したものである。

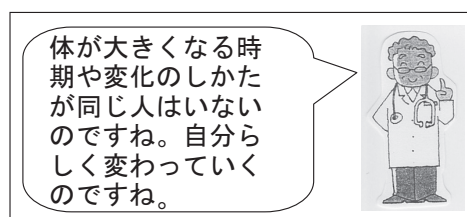


図2 提案の特徴(1)自分のこととして捉える

- (2) 子どもたちが学習内容を肯定的に捉えられるようにする

学習内容を肯定的に捉えるための工夫として、2か所において自分へのメッセージを書くスペースを設けている。ここでは、メッセージとして言葉にすることで、改めて子どもたち自身が体の変化について心配しなくていいのだと自覚できることをねらいとしている。1か所目は、生まれてから第4学年までに大きくなってきたことを確認した後に、2か所目は、体の発育・発達に関する単元の最後に設定している。図3は、2か所目に示したもので、20歳の自分に向けてメッセージを書くことにより、これまでの自分の発育だけでなく、これからの体の変化についても自分らしく変化していけばいいのだと、肯定的に捉えられるように工夫している。

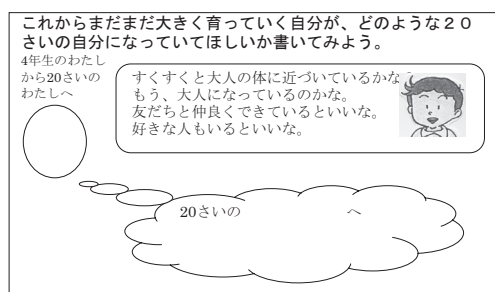


図3 提案の特徴(2)肯定的に捉える

5. 結論

以上、述べてきたように、本研究をまとめると以下のとおりである。

- ① 教科書の内容構成における変遷と特徴として、教科書導入当初に限っては、学習指導要領に示されている内容を具体化しただけのものを並べているに過ぎなかった。しかし、教科書の改訂を重ねるごとに、子どもたちが自分のこととして理解しやすいように“身長伸び”に着目したり、“大人の体験談”を挿入したりするなど工夫するようになっていた。
- ② 本研究における仮説的提案は、子どもたちが学習内容を「自分のこととして捉える」、「肯定的に捉える」という2点に特に配慮して教科書の内容を構成した。

今後の課題としては、授業をイメージした授業プランの提案、そして、授業プランの実施とそこからみつかった課題の解決を繰り返し、授業と授業プランの双方の改善を図っていくことが重要である。

参考・引用文献

- 1) 近藤真庸「“シナリオ&ワークシート”方式による触発・追及型の健康教育」 明治図書 2007
- 2) 小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省 東洋館出版社 p99 2008
- 3) 内海和雄「子どもの身体と健康観の育成—健康教育論—」 医療図書出版 p148, 149 1985
- 4) 森昭三, 和唐正勝「新版 保健の授業づくり入門」 大修館書店 p107 2002 他
(指導教員: 坂田利弘)